

大聖院：観音堂

観音堂は大聖院で最も目を引く建物で、寺院の最も重要な礼拝の場所をいくつか含みます。大聖院の本堂の名誉は丘の上にある勅願堂にあるためこちらは正式には本堂ではありませんが、観音堂には観光客が見るべきものがたくさんあります。メインルームの中央と入口から真向かいにある像は 11 の頭を持つ慈悲の菩薩、十一面観音の表現です。この像は 1868 年、政府が神道と仏教の分離を命じ日本の宗教的思想と実践を 1000 以上支配していた混合主義（注：神仏習合）の伝統を終わらせたときまで厳島神社の主要な仏教神でした。すべての仏教画像は神社から除去されねばならず、十一面観音は居場所を失いました。この像は大聖院に移され、収蔵するために新しい観音堂が建てられました。現在の建物は 1887 年に最初の観音堂が焼失した後、1932 年に再建されたものです。

お堂の左側の部屋は、1885 年の明治天皇(1852-1912)の大聖院訪問を記念するもので、訪問時同じ場所に君主の宿舎が建設されました。展示には、天皇の訪問を描いた絵画や、その重要な出来事に関連する他の制作物が含まれています。

右側の部屋は、その鮮やかなのぼりや他の装飾で際立っており、その色はまた、部屋の真ん中の大きな、黄金の仏像を彩っています。この像は、真言仏教とチベット仏教の中心的存在である菩薩弥勒を表したもので、2006 年に大聖院を訪れたダライ・ラマにより奉獻されました。また、チベットの砂の曼荼羅が展示される弥勒の部屋は、共通の教義のルーツを持つ伝統的な真言密教とチベット仏教の密接な関係を示しています。

お堂の前のベランダには、狭い階段が訪問者を建物の下の暗闇へと導きます。これは慈悲の菩薩「観音」の体を象徴する真っ暗な回廊、「戒壇巡り」への入口です。それを通り抜けると心が清められ、霊性が高められると言われています。廊下の左壁には、中国地方(宮島が属する)の観音を祀る 37 の寺院の神々を表す絵があります。37 枚の絵の前で祈りを唱えるのは全長 1,500 キロの中国観音巡礼を完了させるのと同じ祝福を得られると言われています。